

赤痢の疑いは解消され全員が上陸、徹底的な消毒を受け十数日ぶりに入浴し一泊の後、復員完了を告げられ、僅かな旅費を支給され、それぞれが明日からの健康を誓いあって最後の別れを惜しみながら懐かしい家路についた。

戦友はビアク島で玉碎

—航空兵転科で生き残る—

岩手県 藤 尾 健 造

私は大正十年二月一日生まれ、昭和十六年徴集兵として、昭和十七年二月十日、第三十六師団、第二二三連隊（雪三五二三部隊）要員として弘前の部隊に入った。一週間後、下関から山西省の遼東へ行き、自動車で原野の中、秃山を越えて可成り奥地へ入った。新兵でないと思わせるため偽装の階級章を付けていたが、途中共産八路軍に襲撃も受けた。

北支の二月は寒さが厳しかった。防寒外套を着てい

たが、明治三十年代のもので、私には大きく袖を返したり、腰上げをした。私は甲種合格で体は大きい方だったが、当時の先輩たちからは、「今の甲種合格は体が小さいな」と言われたくらいだから、以前の兵隊は体が大きい。そのためか服も大きかったのであろう。飯盒は柳行李で、多くの弾薬と一緒に持っていたが、小銃は五人に一挺の見せかけで、小銃、帯剣と認識票（私のは二二二—一—三四六、で今でも覚えている）を渡された。

寒い中で、教育を受けるより直ぐ警備についた。まだ馴れないのに分屯隊の勤務にもついた。それは古兵との交替だったからだだった。その陣地はトーチカで、一個分隊ぐらいで警備勤務をしていた。

その当時の思い出は、絶えず八路軍のチャルメラのようなラップを聞いたり、同年兵で手や足を引っ張られたりし危うく拉致されそうになった者もいた。小銃と実弾を常に持って、常に完全武装だった。私は十一年式軽機関銃の射手になったが、重い（四キロ弱）ので、行軍や戦闘行動で頸を出したこともある。

北支の閩錫山軍や共産党八路軍の討伐行で挟み射ちになったこともあり、大行作戦で河南省まで行った。我々は火砲を持っているので山越えの時日本馬は大きいので崖から落ちたりした。大きな音がするので、見ると同年兵が手綱を持ったまま馬と一緒に落ちて行く。離せば助かるのに戦死してしまっただ。

八路軍にやられて一個中隊が全滅したこともあった。その時、私たちは援軍に行ったが、擲弾筒を抱えたまま殺されている兵隊もいた。馬は凹地の一箇所に入り、やられていた。中隊長の泉館中尉は戦死していて、兵器は殆ど略奪され持っていかれた。

我々は逆に、物資や食糧を取りに行ったこともある。私が思い出してみると、トーチカ暮らしが多かった。その間は演習というより、演練という訓練だったわけだ。

下士官候補者になったのは昭和十八年の春頃だった。潞安の下士官候補隊には、各隊から二、三名ずつ選ばれた者が集合して、教育隊は一個中隊ぐらいの兵力で、候補者隊が軍旗中隊となり、中隊長は陸士五十三期か五

十四期の横山中尉だったが、後にビアク島で葛目連隊部長のもとで玉碎されている。

私ら下士官候補者教育が終わらぬうち、第三十六師団歩兵第二二連隊は南方へ行くことになり、そのため下士官候補隊は中隊編成となって南京まで下った。私は兵長で、航空下士官になるため内地へ帰還し、宮城県名取郡岩沼の飛行場へ行った。これが私の運命の分れ目となったわけで、そのことについては後にお話ししたい。

伍長に任官して、今度は埼玉県所沢の陸軍航空整備学校へ入校したが、生徒は皆下士官ばかりだった。所沢での教育は技術面は一般的なもので特別な教育は受けず、次に滋賀県の近江八幡の教育戦隊に行った。そこは、特別幹部候補生の学生ばかりで、助教になって学生に教えた。少年航空兵は基礎教育からやるが、我々の所は短期教育だった。隊の隣には三菱飛行機があったと覚えている。

軍曹に任官したのは、昭和十九年になってからだと思う。教育隊がそのまま、茨城県へ移って行って、そ

の頃になると半分は教育、半分は警備だった。そこは筑波山の見える所で、今のつくば学園都市の所だったと思う。

だから、私の軍歴といっても皆様には申し訳ない気がしてならない。あの時はもう、飛行機の隠蔽が主な仕事で、飛行機を空襲から護るため竹藪などに隠すのだ。そのため私は、約三十名程の班長になり、班員とお寺に泊まっていたので、ほとんど民家の中での生活だった。

兵隊はほとんどが年配の召集兵だった。操縦と違い我々は整備だから、将校も予備役の年配者、隊長は若い航空士官学校出だったため比較的不自由がなかったし、航空隊の給与は一般の歩兵より良く、何かこれも申せない気がしてならない。空襲になればそれこそこちらが狙われ危険が多いのだが。

終戦の時は、埼玉県北部、群馬県境の兒玉町の飛行場だった。陛下の玉音放送を聞いて、はっきりした命令が出たと思うが、とに角「航空隊員は直ぐ帰郷せよ」ということだった。我々は自分の身に着ける物だ

けを持って、その日のうちに帰った。

本庄駅付近で住民が、ある見習士官に「お前たちは我々を守ってくれない」と言っって石を投げた。見習士官は怒って、軍刀を抜いたことを覚えている。列車は兵隊ばかりで混みあっていたが、終戦時に父は故郷の盛岡に帰っていたので、翌日家に帰り着くことができた。

私は東京生まれだったので同年兵は余りいないが、東京空襲で友人は死んでいたし、ニューギニア方面へ行った雪兵団の我が第二二連隊の戦友は、ビアク島で葛目連隊長のもとほとんど玉砕してしまったことを聞いた。今、私たちだけ幾人かが、下士官候補生教育後航空兵転科のため内地に残り、生きながらえることが出来ている。

藤尾健造さんは、そのことについて次のような手紙を私に下さった（星沢）。

『お尋ね下さいましたビアク島の戦闘のこと、私も戦記等で知り、ただただ戦友の御冥福を祈るばかりで

す。その戦闘の激しさを聞き、今もって私は入隊した歩兵第二二二連隊に心を残し転移したこと、戦友も同級生も今は亡く、かつての航空教育隊の同年兵の集まりにも参加したことはありません。生き残って四十余年、何か戦友に思いが残ります。

戦記より知った私の思いを申します。部隊は北支那より南下し、ビアク島で玉砕した戦友の激戦の話、生還した友の話や戦記を読む度に、かつての下士官候補生集合教育の戦友の顔が、そして戦いの中の戦友のことを偲び、葛目連隊長以下戦友の御冥福を祈るばかりであります。

例えば、昭和十八年九月北支山西省での作戦を独立混成旅団に継承し、十月南京に移動、南方作戦の演習の明け暮れの中、十一月二十三日呉淞を出港した部隊と別れて私は内地に、そして戦友たちはビアク島に十二月二十五日に上陸したそうです。

昭和十九年五月二十七日、三万の上陸連合軍を相手に激闘二か月、岩手県出身者の生還は僅かに四十名、下土候魂で突入して行ったであろう戦友のこと。戦史

を読む度に泪し、哀悼の心は言葉に言い表わせず、唯々御冥福を心より記念いたします。

ビアク島に限らず全戦線がその通りのこと、戦後四十数年、生き残ったこと。戦友への思い、残れし人の戦友会にも、どうしても出られず、未だに参加したことがありません』

とありました。死ぬも生きるも国のため、父母兄弟を守るため、故郷を護るため、兵隊たちは純粹に戦い、死んでいったのです。

台湾航空情報部隊

宮崎県 伊地知 薫

昭和十七年徴集、大正十一年三月二十五日、宮崎県西諸県郡旧飯里村（現日向市平岩）で九人兄弟の末子として生まれました。男子は第三子の兄と私のみ、他は姉七人ですが、私と兄は十七歳も違っていて、兄は父の跡を継いで郵便局長（集配区十二、三）をしてい